

資料

子育て・教育・地域支援フィールド開拓のための地域臨床実践（第2報）

ー公開講座を通じた子育て・教育・地域支援フィールド開拓の試みー

後藤 守・川端 愛子

(2013年12月25日受稿)

抄録： 本研究は、文教ペンギンルームが地域と密着して進めている「公開講座」に焦点をあてて、これまでの取組を紹介し、それらを通して、地域の大学におけるこれからの公開講座に対する文教ペンギンルームの立ち位置を次の4点から明らかにした。1つ目は、公開講座を通して地域と大学が相互循環型の活動を展開することの重要性。2つ目は、子育ての中核を占める「関係力」を重視し、文教ペンギンルームで生まれた「関係力育成プログラム（通称ペンギンメソッド）」をベースにして展開していくこと。3つ目は、子どもの関係力（生きる力）を育てる場作りの工夫を大切にしていること。4つ目は「関係力育成プログラム（ペンギンメソッド）」の世界では、子どもの行動に随伴する他者の存在は、専門性の有無を超えて、誰もがチャンスを持つことが可能なこと。以上、4点の立ち位置から、過去3回実施した「公開講座」の実践を明らかにした。

はじめに

北海道文教大学に発足した、こども発達学科と同時に、文教ペンギンルームが発足した。正式名称は、北海道文教大学子育て教育地域支援センターであるが、全国のインターネットの世界では、文教ペンギンルームの愛称で通っている。ペンギンは「子育ての名人」であるばかりでなく、集団での活動にも優れた力を発揮していることでも有名である。

文教ペンギンルームの特徴については、本学の研究紀要第35号に記載している（後藤・川端、2011）。ここでは、文教ペンギンルームが地域と密着して進めている「公開講座」に焦点をあてて、この間の取組を紹介し、それらを通して、地域の大学におけるこれからの「公開講座」に対する文教ペンギンルームの立ち位置を明らかにしていきたい。

文教ペンギンルームの立ち位置について、文教

ペンギンルームのセンター長（後藤 守）が、地域密着型の新聞「千歳民報」に掲載しているコラム「大学からのラブレター」に端的にまとめているので、そのコラムの内容を引用してみよう（2013年10月7日夕刊、北海道文教大学ホームページに転載：文中の通し番号とアンダーラインは筆者による）。

大学からのラブレター

「食欲の秋」「読書の秋」と言われるように、秋はやがて来る長い冬に向けて、エネルギーの充電をし始める季節のようです。

この時期には、どこの大学も「大学開放」というラブレターを発信して、積極的にエネルギーの充電を始めています。そのラブレターの一つが大学の「公開講座」。①一見、大学の公開講座は、地域への一方的なサービス活動のように見られがちですが、実は、私たちの呼吸のように、地域に目いっぱい、大学パワーを発信

するほど、地域のパワーを大きく吸い込むことができるという相互循環型の活動が展開するところが味噌。

北海道文教大学の今年の公開講座のテーマは、「ことばと心と身体の豊かさ」。身近な教養講座から、専門的な知識まで幅広い内容から構成されました。そのなかの目玉の一つとして、②文教ペンギンルームからは「子どもの関係力を育てるブロック遊びとかんたんおやつ作り」という、公開講座としてはユニークな親子体験型のメニューを設定しました。

③この講座のキーワードは「子どもの関係力(生きる力)を育てる場作りの工夫」。ここでは、楽しいブロック遊びやかんたんなおやつ作りの場を設定し、まわりの人たち(大学のおにいさんおねえさん、そしておともだち)との楽しい関わり体験を通して、コミュニケーション力を育てあうことが目的。④ふたを開けて見ると、さすがおかあさん！よちよち歩きの子どもからのブロックサインや一語文などの「ことばのボール」を、巨人軍の阿部捕手のように絶妙なタイミングでスパスパさばいている場面は圧巻。私を含めて学生ボランティア「ペンギン」の学生全員が、逆に、子育ての仕方を教えられた一日でした。おかあさん方に感謝！

(道文教大教授ペンギンルーム所長・恵庭)

このコラムの記事から明らかなように、公開講座に対する文教ペンギンルームの立ち位置は、次の4点から構成されていることがわかる。

その1つは、①で示したように、「一見、大学の公開講座は、地域への一方的なサービス活動のように見られがちですが、実は、私たちの呼吸のように、地域に目いっぱい、大学パワーを発信するほど、地域のパワーを大きく吸い込むことができるという相互循環型の活動が展開すること」を強調しているところにある。このことは、公開講座に限らず、大学の教育研究活動そのものを地域へ還元していく営みが課せられていることを意味

している。2つ目は、②の文章で示したように、「文教ペンギンルームからは『子どもの関係力を育てるブロック遊びとかんたんおやつ作り』という、公開講座としてはユニークな親子体験型のメニューを設定しました」という文章に示したように、「関係力」というキーワードが組み込まれている。文教ペンギンルームの基本的な支援のコンセプトは、われわれが開発した「関係力育成プログラム(後藤・川端, 2011)」をベースにしている。このプログラムは、別名「ペンギンメソッド」と言われ、「場の構造化」「応答する環境」を重視した発達支援の方法である。これはある意味で、石井哲夫らの研究チームの「パンダメソッド(川相, 2013)」のコンセプトと通底する支援の哲学を持っているところに特徴がある。

3つ目は「子どもの関係力(生きる力)を育てる場作りの工夫」。「ここでは、楽しいブロック遊びやかんたんなおやつ作りの場を設定し、まわりの人たち(大学のおにいさんおねえさん、そしておともだち)との楽しい関わり体験を通して、コミュニケーション力を育てあうことが目的」としている。刺激の与え手としての立場に立てば、環境の側からのかかわりそのものが大きな意味を持つと考えられるが、子どもの自発的な行動を受けとめていくという「応答的環境づくり」を重視する立場に立てば、子どもの自発的な行動が生じやすい「場作りの工夫」が求められる。ここでは、その場に居合わず他者の存在が、子どもの自発的な行動をさらに発展させ、安定化させることに貢献する。

4つ目は、「ふたを開けて見ると、さすがおかあさん！よちよち歩きの子どもからのブロックサインや一語文などの「ことばのボール」を、巨人軍の阿部捕手のように絶妙なタイミングでスパスパさばいている場面は圧巻。私を含めて学生ボランティア「ペンギン」の学生全員が、逆に、子育ての仕方を教えられた一日でした。おかあさん方に感謝！」という言葉に表現されているように、この「ペンギンメソッド(関係力育成プログラム)」

の世界では、子どもの行動に随伴する他者の存在は、専門性の有無を越えて、誰もが最適のチャンスを持つことを意味している。とりわけ、時間と空間を共有する割合の高い「母親」の存在は、「ペンギンメソッド」においては重要である。なぜならば、母子が共に体験した「心地よいかかわり」は、文教ペンギンルームの場を離れた家庭においても再び、展開されることが期待できるからである。このことが、母親と子どもが一緒に、この「ペンギンメソッド」に参加することの最大の理由である。

1. 公開講座を支える「ペンギンメソッド」の概要

1-1. はじめに

毎年、開催されている文教ペンギンルームが担当する公開講座は「ペンギンメソッド」をベースにして展開している。この発達支援の方法は、コミュニケーション活動に課題のある子どもたちの発達支援を目的にした「行動空間療法」を発展させ、乳幼児期の子どもたちと母親たちのために、文教ペンギンルームが新しい支援の方法として開発したものである。現在、この母子の良好な関係作りを促す発達支援の方法は、「ペンギンメソッド」と呼ばれている。以下に、この発達支援の方法の概要をまとめてみよう。

1-2. ペンギンメソッド（関係力育成プログラム）

子どもたちが生き生きと活動できるためには「子どもたちをとりまく場」のあり方が、非常に重要である。この「子どもたちをとりまく場」について考えるとき、次の2つのことが検討される必要がある。そのひとつは「応答する環境作り」であり、もう一つは「構造化された場の構成」である。これまでの指導法の基本姿勢は「刺激の与え手」としての指導者のあり方について言及される場合が多い。指導者の側から次々と繰り出す働きかけは、障害をもつ子どもたちの自発的な行動を低減させがちである。また、子どもの選択する

行動の範囲をますます、狭めてしまう。この点を克服するひとつの試みとして、「刺激の受け手」を重視した指導者のあり方が考えられる。子どもの側から繰り出してくる表出行動に対して、受容的かつ肯定的に応答し、その表出行動を応答の脈絡の中で補完するかかわりの世界は一見、目的性の薄いかかわりのように見られがちであるが、子どもたちの能動性を重視するという見方に立てば極めて重要である。関係力育成プログラムでは、子どもの自発的な働きかけに対応して応答する環境作りが大きなテーマとなっている。この「応答する環境作り」と密接に関連しているのが「構造化された場の構成に関する工夫」である。ともすれば、拡散しがちな発達面に課題をもつ子どもたちの行動を間接的に方向づけ、安定化させるためにも「構造化された場の構成に関する工夫」は大切である。

ペンギンメソッド（関係力育成プログラム）による指導では時間と空間を他者と共有する中で生じてくる子どもの行動を重視し、そのような行動が生起しやすいような場を設定して指導を展開していくところに力点がかけられている。ここでは、子どものかかわり行動の自発的な生起を重視し、相互のかかわり行動の連鎖の中で、ひとつの方向性を持つことができるような指導者間の相互連関性を持った動きが要求されている。

1-3. 場の設定による空間構成

ペンギンメソッドでは、場の設定の仕方を工夫している。具体的には、文教ペンギンルームでは、2段重ねの舞台を設定し空間を構造化している。舞台の大きさはプレイルームの広さ、あるいは、集団の規模によっても異なるが、基本的には、参加者全員が舞台の上に集合できる大きさが好ましい。舞台の形と構成は、われわれがこの発達支援法を開発した時に考案した。舞台の配置は、いろいろと考えられるが、本プログラムの場合、プレイルームの中央に設定することが最も望ましい。舞台を中央に置くことによって、プレイルームもしくは体育館の空間が2つの異なる特性を持つこと

ができる。中央にある舞台空間は、集まりやブロックの組み立ての活動に用いられることが多く、比較的静的な空間である。ペンギンメソッドでは、この空間をCo空間（CommunicativeSpace）と名づけている。この指導法では、このCo空間をとりまく周辺の空間をRo空間（RoundSpace）と名づけている。Co空間が比較的、静的で限定的であるのに対して、Ro空間は動きの大きい、いわゆる動空間としての特性を持っている。

1-4. 活動素材（遊具）の選定

ペンギンメソッドの場合、使用する遊具の選定が大きな意味をもつ。使用する遊具について特別な規制はないが、このプログラムの性格から、遊具の選定にあたっては以下の4点の条件を満たすものであることが求められる。

- (1) 移動可能な素材で比較的大型であるもの。
- (2) 用途が固定されておらず共通に活動素材として使用可能なもの。
- (3) 組み立て可能な部品で構成され、子どものイメージで多様な活動ができるもの。
- (4) 行動空間（Co空間、Ro空間）での活動の媒介物となり得るもの。
- (5) 活動の流れの中で、参加メンバーのやりとりが生じやすい属性を持つもの。

ペンギンメソッドで採用している活動素材（遊具）は大型の組み立てブロックと組合せ可能な滑車に限定している。一種類の活動素材に限定しているのは、共通の素材を通して、人とかかわりや集団としての共通の動きが作りやすいことを意図していることによる。また、滑車つきのブロックを導入しているのは、空間移動の中で他者との接触の頻度を高める状況を自ら作り出す機会を提供しようとしていることによる。

1-5. 指導者集団の構成と役割

ペンギンメソッドにおいては、活動の流れの中で場の構造化をはかることが求められている。この課題は、指導メンバーに課せられた課題である。この課題のために指導メンバーは、チーフティーチャー、サブティーチャー、アシスタントティー

チャーから構成される。

チーフティーチャーは、他の指導メンバーと共に、子どもとかかわりの中で全体の活動の流れを方向づけ、より密度の高い行動空間が構成されるような展開が要求されている。チーフティーチャーは全体の活動の流れを方向づけ、まとめていく役割が課されているが、その一方、活動の場との関係では、行動空間の軸としての役割を持つ。チーフティーチャーの活動している場は「軸空間」と呼ばれ、行動空間の中で最も焦点化されるべき空間と言える。他の指導メンバーは、このことを十分留意し、チーフティーチャーの行動の軌跡をたえず意識に入れて、自分の位置を見定めることが大切である。その意味では、チーフティーチャーは、オーケストラの「指揮者」のような性格を持ち合わせている。ともすれば、他の指導メンバーは特定の子どもとかかわりすぎて、全体の活動の流れを見失う場合がある。このことによって、指導者が子どもと全体の活動の流れの間の立て壁になってしまい、子どもが他者とかかわるチャンスを奪ってしまうことのないように、チーフティーチャーの位置に標準を合わせている必要がある。この側面から見れば、チーフティーチャーは航海する船のための「灯台」のような性格をもつ。

チーフティーチャーの構成する軸空間は、最終的には特定の場に固定される必要がある。なぜなら、軸空間が限り無く移動し続けると、「指揮者」としての機能は失わないまでも、「灯台」としての存在と「港」としての存在が薄くなってしまからである。なによりも、他の指導メンバーがチーフティーチャーの行動の軌跡と軸空間がわかりやすいように手がかりを提供することが必要である。たとえば、他の指導メンバーが子どもと行動を共にしながら、軸空間に接近してきたりした時には、ブロックの手渡しや、声かけなどを通して、「行動を同期させる」こともひとつの方法である。

以上、述べたように、チーフティーチャーは、「指揮者」「灯台」「港」としての役割が課されて

いることから、活動の流れが次第にひとつの方向性を持ち、軸空間としての密度を高め始める段階、いわゆる、「しぼり」がかけられてくると、チーフティーチャーの位置移動は最小限にすることが求められる。サブティーチャーは、チーフティーチャーをサポートする役割が課せられていることから、チーフティーチャーが位置移動を最小限にとどめることができるように努力することが求められる。特に、軸空間の形成のために必要なブロックの補充、ブロックの組み立ての手伝い、および、チーフティーチャーと他の指導メンバーが、接点を取りやすいように動空間において、活動の流れを作る仕事も併せて担当する場合もある。その意味では、サブティーチャーは2つの側面をあわせ持つ。すなわち、一方ではチーフティーチャーの動きと連動して軸空間を構成する活動を担当するという意味で、チーフティーチャーの分身であることが求められ、もう一方では、他の指導メンバーと連携して活動の流れを作ることが求められるわけである。他の指導メンバーは、チーフティーチャーとサブティーチャーの動きを同時に見ることによって、今、指導の流れがどのような局面にあるかの手がかりを得ることができる。

1-6. 軸空間の構成

軸空間は、Co空間とRo空間、2つの空間の中のどこかに、チーフティーチャーが活動の場を設定することによって形成される機能的特性と構造的特性がマッチングされた、特異性の高い空間である。軸空間の形成のための場の設定は、チーフティーチャーが決定するものであるが、構成全体の活動の流れとチーフティーチャーの意図する活動の方向性と展開によって、必然的に決定づけられる側面を持っている。その意味では、チーフティーチャーの状況判断と活動の方向性の決定が、活動全体の凝集化の水準に大きく影響する。

2. 公開講座の実際

2-1. 平成22年度 北海道文教大学公開講座

子育て教育地域支援センター「母と子が元気の出る『関係力育成プログラム』 実地体験」

(1) 講座概要

この講座では、子どもとお母さんが一緒に参加し、人や物と関わる力を育む「関係力育成プログラム」の実地体験をします。このプログラムは、大きなブロックを使ってグループで楽しく遊びながら、自然と「仲良く遊べる力」が身につくプログラムです。

(2) 担当講師

後藤 守：北海道文教大学子育て教育地域支援センター長・教授（臨床心理士）

川端 愛子：北海道文教大学子育て教育地域支援センター担当助手（臨床心理士）

(3) 日時

平成22年9月8日（水）10：30～12：00

(4) 会場 北海道文教大学7号館1階子育て教育地域支援センター「文教ペンギンルーム」

(5) 定員 母子10組（3～5歳児）

2-2. 公開講座実施状況

(1) 当日の様子



写真説明1. 担当スタッフ（写真左側）とはじめのあいさつ（ここでお互いの名前を確認し合い呼吸合わせをしている）



写真説明2. チーフ(写真中央)からブロックをもらって、トンネルを通過するおともだち(ここは軸空間と呼ばれ、最も、密度の高い空間と言われている)



写真説明3. 第1回公開講座記念写真(センター専任スタッフ、学生ボランティアも一緒に参加)

3-1. 平成23年度 北海道文教大学公開講座

子育て教育地域支援センター「子どものアタック力を育てる関係力育成プログラムの実地体験」

(1) 講座概要

この講座では、文教ペンギンルームが開発した「関係力育成プログラム」の実地体験を通してお子さんの力を引き出す「場の大切さ」を見ていただきます。

このプログラムには文教ペンギンルームのスタッフ(こども発達学科の学生を含む)と一緒に、お母さん、お子さんが大きなブロックを使って楽しく遊びながら、自然と「仲良く遊べる力」が身につく工夫が組み込まれています。

ここでのキーワードは、「自己選択・自己決定」です。一丁前にブロックを使いながら働いてい

るお子さんの別の姿をのぞいてみませんか。

(2) 担当講師

後藤 守 北海道文教大学子育て教育地域支援センター長・教授(臨床心理士)

川端 愛子 北海道文教大学子育て教育地域支援センター担当助手(臨床心理士)

(3) 日時

平成22年9月7日(水) 10:30~12:00

(4) 会場 北海道文教大学7号館1階子育て教育地域支援センター「文教ペンギンルーム」

(5) 定員 母子10組(3~5歳児)

3-2. 公開講座実施状況

3-2-1. 後藤 守センター長によるミニレクチャー



写真説明4. 後藤センター長によるミニレクチャーに対するお母さん方の質問コーナーの場面

3-2-2. ペンギンメソッドによる遊びの体験



写真説明5. 赤ちゃんもぬいぐるみを相手に一丁前に活躍中(プレイルームでは、約20個の名前付きのぬいぐるみが住み込みで活躍している。)



写真説明6. 親子ともども新人とは思えない活躍ぶり（この場面では、ペンギンスタッフと一緒に常連の母親アドバイザーと学生ボランティアペンギんの学生が活動の流れを作っている）



写真説明7. チーフからブロックをもらってトンネル（軸空間）を通過する子どもたち（この場は最も密度の高い場で「チーフのもつ灯台・港などの特性とチーフの指揮者としての特性を合わせもっている」特異性の高い空間である）。

3-2-3 テーマ曲「ペンギンルームのおともだち」の登場

この講座の初めとおわりには、オリジナルのテーマ曲「ペンギンルームのおともだち」（ペンギンルームニュース2011年6月特別号掲載）を歌っている。この曲には、この日に参加した子どもたち一人一人の名前が歌詞に組み込まれている（図1参照）。

このテーマ曲「ペンギンルームのおともだち」は、2013年度には、国際化の流れのなかで、英語版「Penguin room friends song（Lyric and music : Aiko Kawabata, Translation : Melanie Yamazaki）」が作られている。

この英語版は、日本語版と同様に、ペンギンルームの子どもたちやおかあさん方の中で、自然と口ずさまれるようになっていく（興味のある方は、北海道文教大学のホームページに掲載されている「2014年10月文教ペンギンルーム特別号」を参照してほしい）。

文教ペンギンルームニュース6月☆特別号
～ペンギンルームのテーマ曲ができました！～

文教ペンギンルームのテーマ曲「ペンギンルームのおともだち」が完成しました！その日、ペンギンルームに来てくれたおともだち一人一人の名前が歌詞に入ります。

ペンギンルームのおともだち
作詞・作曲：川満愛子

ペンギンルームによくきたね
○ ○ ちゃん ○ ○ ちゃん ◇ ◇ ちゃん ◇ ◇ ちゃん
ペンギンルームのおともだち

☆ この部分には、ペンギンルームに来てくれたお子さんたちの名前を入れていただきます。最初に、指導スタッフがうたい、続けて参加のみなさん全員で（ ）の中の繰り返し部分をつたえます。お子さんが増えるごとに1小節ずつ増えています。

子育てトライアングル「あいあい」では、遊びの始まりと終わりに参加者全員でこの曲をうたっています。音楽にのせて「自分の名前をよばれる」「おともだちの名前をよぶ」という体験を通して、一緒に活動する「心の土台」が作られていくことを願っています。

【問い合わせ先】北海道文教大学子育て教育地域支援センター
「文教ペンギンルーム」（後藤・川端）
Tel. (0123) -29-8052 Email kawabata@do-bunkyo.ac.jp

図1 文教ペンギンルームニュース6月特別号



写真説明8. 「全員集合してみたらものすごい迫力の写真ができました！」（ペンギンメソッドの体験者も参加していることから、場が盛り上がった活動の直後の様子。前列右側センター専任スタッフ）

4-1. 平成24年度 北海道文教大学公開講座

子育て教育地域支援センター子どもの関係力を
育てる「ブロック遊びとかんたんおやつ作り」

(1) 講座概要

この講座は親子体験型学習の内容で構成されています。この講座のキーワードは「子どもの関係力の育成」です。お子さんと楽しいブロック遊びやかんたんなおやつ作りの活動と一緒にすることを通して、まわりの人（お母さんや大学のおねえさんおにいさんそしてお友達）との「楽しいかかわり方」を体験してもらいます。ご自分のお子さんが、「もう少し、元気になってほしいなあ」と思っておられるお母さん、お父さんには、ぜひ、参加してほしい「おすすめの講座」です。

(2) 担当講師

後藤 守：北海道文教大学子育て教育地域支援センター長・教授（臨床心理士）

古郡 曜子：北海道文教大学こども発達学科講師

川端 愛子：北海道文教大学 子育て教育地域支援センター担当助手（臨床心理士）

(3) 日 時 9月12日（水）9：30～11：30

(4) 会 場 子育て教育地域支援センター（文教ペンギンルーム）

(5) 定 員 母子10組（2～4歳児）

4-2 公開講座実施状況

平成24年度の公開講座の様子は、これまで通り、参加者の了解を得て、文教ペンギンルームの10月特別号に掲載し紹介した（図2参照）。

平成24年度の公開講座では、新しく、こども発達学科の古郡曜子講師の力も借りて、子どもの関係力を育てる「ブロック遊びとかんたんおやつ作り」といテーマで、さらに、踏み込んだ展開をした。

また、平成25年度の公開講座からは、3名の母親アドバイザーが参加し、センタースタッフと一



図2 文教ペンギンルームニュース 10月特別号

般参加の親子をつなぐ役割を担当した。

5. 終わりにあたって

本論文では、文教ペンギンルームの公開講座を通して、地域密着相互還流型の実際についてまとめてみた。

今後の課題としては、次の2つがあげられる。その一つは、発達支援の方法として導入してきた「関係力育成プログラム（通称ペンギンメソッド）」の有効性の確認である。もう一つは、母親アドバイザーの導入、学生ボランティアの養成にかかわる課題である。今後、これまでの取組を丁寧に振り返りながら、文教ペンギンルームの実践とこれまでの研究で得た知見を次の「公開講座」の取組に反映させていきたいと考える。

最後に、この取組を全面的に支持し一緒に取り組んでくれた、恵庭市、北広島市、千歳市在住のお子さんと保護者の方々、ならびに母親アドバイ

ザー、学生ボランティアぺんぎんの皆さん方に感謝を表します。

文 献

- 1) 後藤 守・川端愛子：文教ペンギンルームにおける子育て支援のための関係力育成プログラム実践（第1報）－関係力育成プログラムによる学生支援を通して－. 北海道文教大学研究紀要, 35 : 127-140. 2011.
- 2) 川相豊子：発達障害の問題を抱えた親子をつなぐ支援－受容と交流の実践－. 日本福祉心理学会第11回大会プログラム・発表論文集 : 63, 2013.
- 3) 川端愛子・後藤 守：文教ペンギンルームにおける子育て支援のための関係力育成プログラム実践（第4報）－「文教ペンギンルームニュース」を通して振り返るセンターの活動のこれまで－. 北海道文教大学研究紀要, 37 : 237-249, 2013.
- 4) 後藤 守：大学からのラブレター. 千歳民報コラム「ゆのみ」2013年10月7日
- 5) 文教ペンギンルームニュース2012年10月特別号, 北海道文教大学ホームページ. <http://www.do-bunkyodai.ac.jp>

